

ナチュラルキス3

目次

ナチュラルキス3

5

見つめる眼差し

287

ナチュラルキス3

1 お着替えの時間

解けない。どれだけ考えても解けない……

超をつきたいほどの難問がずらりと並ぶ数学の問題用紙に顔を歪め、榎原沙帆子はため息をついた。なんと半分ほどは解いたものの、正解しているのかは危うい。頭の使いすぎで、マジで熱が出そうだ。彼女は自分の額に手のひらを当て、熱が出ていないか確かめたあと、そつと後ろを窺った。ベッドに半分横になり、前の分の添削をしてきているのは、彼女の副担任である佐原啓史。色々わけあって、佐原は、彼女と結婚するなんて話になってるわけで……。いまは、期末試験のために家庭教師を務めてくれている。それにしても……

ベッドに肘をついた佐原がペンを手にし、気難しい顔で問題用紙を見つめている様子を、沙帆子はうっとり見つめた。

カ、カッコイイ……どんな格好しても、何してもカッコイイよお。

用紙の数箇所にチェックを入れた佐原が、まるで沙帆子の視線に気づいたかのように顔を上げた。かつちり目を合わせてしまい、動揺した彼女はついつい視線を泳がせてしまう。

「まだ、理解してないな」

その厳しい指摘に、沙帆子は顔を引き締めた。

佐原の作る問題は難問ばかりなのだ。こうも難しいものばかりじゃ、やる気も失せる。

だって、頭が自動的に拒否の態勢に入るんだもん。

そう言いたいところを、沙帆子はぐっと我慢した。余計なことを言って、鬼を刺激したくない。

ほつぺた引つ張りの刑になど、そう何度も遭いたくないし、そんなことをしていたら、これからもらえるはずのご褒美が消えかねない。

実は今夜、試験勉強を頑張ったら、佐原が卒業式の日に着ていたダークスーツを着て見せてくれる約束になっているのだ。

佐原はおもむろにベッドから起き上がり、沙帆子に近づいてきた。歩み寄ってくる佐原を見て、彼女の心臓は勝手にドキドキし始める。

佐原は沙帆子の横に立ち、添削を終えた用紙を机に置いた。

ふたりの腕と腕が、ほんのかすかに触れる。

この微妙な触れ合いは……疼く……。それも、ジンジンと甘く疼く……

ぎ、ぎゃぴっ！

もどかしい触れ合いに、沙帆子はなんともいたたまれず、心の中で叫びを上げた。

嫌じゃないのだ。もちろん嬉しい。けど、けどお。

「いいか。こは、これとこれに注目するんだ」

佐原のほうは、甘い疼きなどまるきり感じていないようだ。堅苦しく説明をしながら、彼は沙帆

子の背後に回り、後ろから抱くような姿勢で机に両手をついた。

佐原の身体が、彼女の背中に、またまた微妙に触れる……

お、おぎよっ……

その姿勢のまま説明を続け、佐原は右手で持った赤いペンで、丸やら線やらを書き込んでいく。教えていただいている身で、惚けていてはまずいと思うものの、佐原の言葉はほとんど理解できぬまま頭を素通りしていつてしまう。

「これとこれをまず処理して、それからこれ。すると、答えはこうなる？ わかるか？」

「は、はい。い、いえあの、もう一回……説明を……」

佐原は文句も言わず、丁寧に説明を繰り返してくれた。沙帆子は必死に理解しようと頑張った。

しかし、このシチュエーションってば……佐原の言葉は教師口調で硬いが……まさしく彼女が望んでいたもの……

「わかったか？」

桃色の頭でぼおつとしているうちに、説明は終わってしまった、沙帆子は焦った。

「あ……い、えつと、と。……あ、あの、もう一度お」

「お前、俺の説明、真剣に聞いてないな？」

「そ、そんなつもりな、なくて……」

佐原が沙帆子の肩に手を置き、顔を覗き込んできた。叱られるのか、それともキスされるのかと彼女は身をこわばらせたが、佐原は何も言わず、すつと身を離してしまった。

な、なんだ……

叱られなかったことにはホッとしたものの、ちよつぱり期待してしまったキスもなし……

頭が冷え、胸のドキドキも収まっていったが、残念な気持ちが残った。

「あと、一時間頑張ろう」

佐原の励ますような声のおかげで、沙帆子は途端に元気が出た。

そうだ、無心で頑張るのだ。あと一時間頑張れば、待ち望んだご褒美がもらえるのだ。

「それにしても、遅いな」

時計を見つつ、佐原が独り言のように呟いた。佐原が言っているのは、沙帆子の両親のことだ。

《持ってなければ、大家に行け！》なんて書いたおかしな紙っぺらを玄関ドアに貼り付け、いったいどこに出かけてしまったのか、ちつとも帰ってこない。

夕食は、沙帆子と佐原のふたりぶん、きちんと用意してあった。

日頃、イチャイチャしてばかりの両親だ。たぶん、今夜もデートをしているに違いないと思うのだが。彼女の母ときたら、こういう普通でないことをやらかして、娘を驚かせるのが好きなのだ。

それにしても、今夜は本当に大変だった。佐原の兄であり彼女の元担任であるテッチン先生が、突然やってきて、沙帆子はとんでもなく緊張させられた。

テッチン先生は、ふたりの結婚には反対だと言いにきたのだ。そして、本当に結婚などして後悔しないのかと、彼女を厳しく問いただしてきた。

沙帆子の返事で納得してくれたのだろうか？ 納得などしていないけど、試験勉強の邪魔だから早く帰ってくれと佐原に言われ、渋々帰ることにしたただけだったのだろうか？ 佐原の父親もまだ結婚を認めてくれてはいないようだし……

結婚……さ、佐原先生とわたし、本当に結婚しちゃうかもしれないだよね？

沙帆子は急に落ち着かない気分になった。自分自身、結婚を現実として受け止めきれていなかったりする。だって、ずっと片思いしていた憧れの佐原先生と結婚だなんて……冗談みたいだ。けど、現実には進んで……

佐原がベッドの上に広げていたものを片付けている音が耳に届き、彼女は考えるのをやめた。そして、自分も机の上を片付け始めた。

それにしても遅い。すでに夜の十一時になるうとしているのに、いったい両親はどこで何をやっているのだろうか？

ともかく勉強は終わった。両親は心配しなくても、そのうち戻ってくるだろうし……

つ、ついに、待ちに待ったご褒美がもらえるのだ。

片付けを終えた沙帆子は、期待に胸を躍らせた。

あの美味しい佐原を、ついにこの手に……それもひとりじめできるのだ。

無意識のうちにぐっと右手を拳に固めた沙帆子は、ポケットを押さえ、携帯の存在を確かめた。写メ、撮らせて欲しいって、駄目もとで頼んでみなくちゃ。

にやつきながら佐原に視線を向けると、何やら気難しい顔で考え込んでいる。

「帰ってこないはずがない」

沙帆子は眉を寄せた。確かに両親の帰りが遅すぎる。未だ、連絡もないし……

彼女はハッとしたり。ま、まさか……

「せ、先生、も、もしかして……事故に巻き込まれてたりとか……してませんよね？」

「電話してみよう。だが、心配するな。まずその可能性はない。もし事故なんてことがあれば、病院から連絡が入らないはずがないからな」

「で、ですよね」

佐原の言葉は力強かった。おかげで少し気が楽になったものの、まだ不安が胸の底にこびりついている。彼女の心情を察してか、佐原は沙帆子の側に来て、背中に手を当てると、そっと撫でてくれた。

携帯を取り出した佐原は、手早く操作して耳に当てた。

「芙美子さん、啓史ですが。……ええ。いま、どこに？」

ちゃんと電話に出たらしいことに、沙帆子は心の底からほっとした。

佐原は何を聞いたのか、眉をぐっと寄せた。

「冗談でなく？」

冗談？

ずいぶん長いこと芙美子が話し続けているらしく、しばらくの間、佐原は「ええ」とか、「はい」

とかの相槌を打つばかりだ。

「ええ。持ってきました」

持ってきた？ 沙帆子の頭に、佐原が持ってきたもう一つの紙袋が頭に浮かんだ。

例のブツのことを、母に話しているはずはないから……

沙帆子はベッドの上に置かれた紙袋に視線を貼り付けた。あの中には何が？ 持ってきたと佐原が母に言ったのは、たぶんあれのことに違いない。

いつの間にか電話を終えたらしく、佐原は沙帆子が見つめていた紙袋を持ち上げた。

「あの？ ママ、なんて？」

「ほら」

紙袋を目の前に突き出され、沙帆子は意味がわからずぽかんとした。

「ご褒美の袋は、これではない。」

「先生、ブ……こ、コホ、コホ……」

ブツと口にしそうになった沙帆子は、小さな咳で誤魔化した。

「ふ、袋が違いますよ。あれでしょ？」

「こいつが先。ほら」

こいつが先？ いったいこいつには何が入っているのだ？

「先生、ご褒美は？」

「ああ。そっちはあとでな」

押し付けられた袋を受け取り、彼女はわけがわからぬまま胸に抱えた。

「先生、これって、いったいなんなんですか？」

彼女の問いかけに、佐原は沙帆子を見つめ、いやに思わせぶりに、ゆつくりと腕を組む。

「開けてみるよ」

目が鋭さを増してゆき、それまでにない危険な光がさした。彼女はわけがわからないながらも、ぎよつとして身を引いた。

「い、い、いったい……？ 何か怒らせるようなこと……したのか、わたし？」

「ど、ど、どうして、怒ってるんですか？」

「俺に、おかしな濡れ衣着せやがって……」

ぬ、濡れ衣う？

「あの一、おっしゃる意味がまったくわかんないんですけどお」

「そうか？ とにかく開けてみるよ。俺の言ってる意味がわかるんじゃないか？」

この袋の中身と、濡れ衣にどんな関係が？ 彼女は戸惑いつつ、袋に手を入れて、中に入っているいくつかの包みのうち、一番大きなものを引っ張り出してみた。

佐原はベッドに腰かけて、彼女が取り出した箱を無表情で見つめている。この箱の中身にさほど興味はなさそうだし……先生ってば、何を考えているのだろうか？

沙帆子の手を止めていたからか、佐原の視線がすつと動き、目を合わせてきた。無言の要求をはつきりと感じ、沙帆子は自分の手元に目を向けた。

それにしても、ずいぶん派手な包装だ。真つ赤な下地に金のストライプの包装紙でラッピングされている。椅子から立ち上がった沙帆子は、ベッドの上に箱を置き、テープを丁寧に剥がして包装紙を取り去った。蓋を開けようと手をかけた沙帆子は、佐原に目を向けてびびった。なんでか佐原は、鋭い眼差しで箱を見つめている。その眼差しを自分が食らうことに怯え、彼女は慌てて蓋を開けた。その途端、佐原の顔が変化した。

「なんだか知らないが……口元が、にやけてないか？」

「沙帆子は下を向き、箱の中身を見た。こ、これは？ 紺色の……服……だよね？」

「洋服ですか？ なんか、制服みたいな色してますね」

「いや、制服よりは、もう少し明るい紺かな？」

「手に取って持ち上げてみると、膝上の丈のスカートで、裾には真つ白なレースがついていた。」

「か、可愛すぎないか？ ……なんだか幼児服みたいなの……」

「それにしても、この服と、濡れ衣の關係が、まだ見えてこない。」

「彼女は次の服を掴みながら、答えを探し続けた。」

「こ、これ？ やっぱり……せ、制服？」

「真つ白な襟に、存在をアピールしすぎののでつかいりボン。半そでのところには、白いラインがつけてあって……。しかし……このデザイン……どこかで？」

「あーっ！」

「沙帆子は驚きの叫びを上げた。これは忘れもしない、大恥をかいたあのときの……そう、去年の

学園祭のとき、クラスでやったメイド喫茶のメイド服にそっくりだ。もちろんこちらは安物の布地を与えられて沙帆子が作ったもので……だが、よく似ている。」

「な、なんで？」

「佐原が腕を伸ばしてきて、箱の中から白いものを取り上げた。」

「そいつはエプロンだった。間違いなくメイド服用のエプロン。しかも大きなフリル付き。」

「口の端を上げて笑みを見せた佐原は嘩然としている沙帆子の顔の前で、これみよがしに振る。」

「芙美子さんは、俺がお前にメイド服を着せて楽しんでると思込んでるぞ」

「とんでもない話に、沙帆子は目を剥いた。」

「ま、まさか。こんなこと……ど、どうして？」

「俺が聞きたいよ。……お前から聞いたって、芙美子さんは言ってたけど？」

「沙帆子はぎょっとし、激しく首を左右に振った。そんな覚えはない。それこそ濡れ衣だ。」

「い、い、言ってます。ほんとです。……けど、な、なんで先生がこんなもの持って……」

「着てみるよ」

「沙帆子の問いなど取り合わず、佐原は命令するように言う。凄みのある目を向けられ、彼女は引けるだけ後ろに身を引いた。椅子に足が当たり、よろけそうになりながらも、沙帆子は両手を上げて精一杯の拒否をした。」

「や、や、やですよ」

「芙美子さんから写真撮つとけて……指示を受けてる」

写真？　なんで写真なんか？　まさか、テーブルの上の使い捨てカメラは、このために？

「あ、あの？　佐原先生、パパとママは？　そろそろ帰ってくるんですよね？」

佐原が意味深な笑みを浮かべた。なぜか背筋がゾツとして、鳥肌が立った。

「せ、先生？」

「いいから着ろよ。俺もこれ着てやるんだ。これでおあいこつてことにしてやるよ」

例の美味しいブツの入った袋を持ち上げ、佐原はドアのほうへスタスタと歩いてゆく。その姿を目で追っていた沙帆子は、右手を差し出して呼び止めた。

「そ、それなら。先生も」

ドアノブを掴もうとしていた佐原が足を止め、振り返った。

「なんだ？」

「写メ、と、撮らせてくださいっ」

い、言つたー！　言つたぞ、わたし！

「写メ？　俺の？」

「は、はいっ！」

覚悟していたとおり、佐原は不機嫌そうな顔になった。

「俺、写真撮られるの嫌いなんだ」

「そんなあ、いいじゃないですか」

写真撮ったからって、減るもんじゃないし……という言葉は、賢明にも呑み込む。

「……まあ……いい……」

思い直したように言うと、佐原は鋭い目つきでにやりと笑う。

胃がひゅつと飛び上がったような気がして、沙帆子は無意識に胃のあたりをくるくるさすった。

その目は？　な、何を考えて……？

「お前……次第だな」

「わたし……し、し、次第？」

佐原は「ああ」と答え、さっさと部屋を出ていった。

ひとりになった沙帆子は、安心してメイド服を見つめた。

ど、どういうことなんだろう？

思考能力が戻って一番はじめに、その問いが浮かんだ。まったく話が見えなかった。

母は何を勘違いしているのだ？　佐原はなんと言つたっけ？　母は佐原になんと言つたど？

え、えーと、えーと？　俺がお前にメイド服を着せて喜んで……とかなんか？

メイド服のことを母に話したのは、お化粧してもらった、あのときだけのはず。

佐原先生とぶつかってシャツに口紅をつけたことを話して……それから？

沙帆子は必死に記憶をさらった。話の流れでメイド服のこと話したよね。けど、あれがどうして、

佐原が沙帆子にメイド服を着せて楽しんで話にまで飛躍するのだ？

あー、母がわからない。頭を抱え、沙帆子は身体を左右に揺すって身もだえした。

とにかくいま、沙帆子はこいつを着なければならなかったということなのだ。ベッドの上にあるメイド服を彼女はじっと見つめた。頭がくらくらとする。

こ、この服を着て……佐原の前に出てゆくのか？

スカートを目の前に差し上げて、その短さに改めて衝撃を受け、沙帆子は「ぎゃっ」と叫んだ。最初に見たときより、こいつ短くなってないか？

自分がこれを着た姿が頭に浮かび、顔が燃えた。

は、恥ずかしくないさうさ。

沙帆子は両手で顔を覆い、後ろに仰け反った。

そうだ。いまずぐ、パパとママが帰ってきてくれれば……

沙帆子はポケットから携帯を取り出し、すぐさま母にかけた。だが、電源を切りでもしたのか、それとも電波が届きにくいところにいるのか、繋がらない。父にもかけたが同じことだった。

「いったい、どういうことお〜」

ドアがノックされた。

「は、はいっ」

「着替えたか？」

「ま、まだ。も、もうちよつとですっ」

着替えていないことがばれるのが怖くてそう言ってしまった、彼女は悔やんだ。これで、着替えなわけにはゆかなくなってしまった。ため息をついた沙帆子は、ドアに視線を向けた。いまドアの

向こうにいる佐原は……あの美味しい姿のはずだ。

み、見たい。いまずぐ部屋を飛び出て行って見たいっ！

もおおお〜、こうなりや、やぶれかぶれだ!!

心の中で叫んだ沙帆子は、メイド服を鷲掴みにした。

ぶかぶかというほどではないが、メイド服は少しばかり大きかった。それでも、スカートの長さは、思っていた以上に短い。彼女は泣きそうな顔で、スカートの前を両手で押さえた。だが、前に引く張ると、後ろが上がる。後ろを下げると前が上がる。

ひーん!!

な、なんで、わたしがこんな目に……

涙目でエプロンを取り上げた沙帆子は、本人的には、佐原以上の凄みを加えてエプロンを睨みつけてやった。ほんの少しウサを晴らした彼女は、超プリティなエプロンを身につけた。姿見があるが、その前に立っていまの自分の姿を確認する勇氣はなかった。見てしまったら、この部屋に鍵をかけて……実際は鍵などついていないが……立てこもりたくなるだろう。

沙帆子はふーつとため息をつき、紙袋を見つめた。中にはまだ何か入っているようだ。

手を突っ込んで取り出した包みには、パニエと書いてある。開けてみると、真っ白なスカートみたいなのが出てきた。どうやらスカートの下に着込むものようだ。それを穿いてみると、スカートがふつくと広がった。こ、これでは、さらにスカートが短く見える、気が……

「おい、着替えたのか？」

ノックの音と一緒に佐原の声が聞こえ、沙帆子は飛び上がった。

「ま、まだ」

「早くしろよ」

「は、はいっ」

返事をした沙帆子は、耳を澄ましてドアの外を窺^{うかが}ってみたが、佐原が遠ざかる足音は聞こえなかった。どうやらドアの外で待っているつもりようだ。焦りに駆られ、心臓をドキドキさせながら、沙帆子は真っ白なオーバーニーソックスを履き、最後の包みに手を伸ばした。白いフリフリのついたカチューシャだ。それをじーっと見つめたあと、彼女はやけっぱちで頭につけた。

ど、どうだ！ これでもう、なんの文句もあるまいっ！

沙帆子はベッドの上に乗る、両手を腰に当ててふんぞり返った。

「沙帆子、まだか？ お前、着替える気、あんのか？ いい加減にしろよ！」

苛立ちのこもった佐原の声に驚いた沙帆子は、思わずぴよんと飛び上がった。が、運悪く、着地の瞬間、滑りやすい材質の包装紙に足をとられ、つるりと滑ってすっ転んだ。

「ぎゃーっ!!」

ひっくり返った沙帆子の背中にベッドの端あたり、彼女の身体はスプリングで一回バウンドした。自分の身を守ろうと、沙帆子は両手を上げて万歳の姿勢になり、床に手を突いたが、下半身はベッドの上にそのまま取り残された。

沙帆子の叫びに驚いたらしい佐原が、バーンと勢いよくドアを開け、部屋の中に踏み込んできた。

「だ、大丈夫か？」

あられもない姿でひっくり返っている、いずれ妻を見て、佐原が固まった。

あー死にたい……

2 甘い眠り

恥辱にまみれた心で、沙帆子はベッドの上に乗っかっている下半身を、ベッドの下に落とす。その動作のせいで、佐原の目に、いっそう無様な姿を晒^{さら}すことになったが、彼女はその事実に、気づかなかったことにした。ドア口で固まっていた佐原は、沙帆子の全身が無事ベッドの下に落ちた瞬間に、ようやく我に返ったのか側にやってきた。

「だ、大丈夫か？」

佐原は真剣に沙帆子の安否を心配してくれているようだった。が、あんな失態を見られては、平気などいられない。沙帆子は自分の膝を抱えて顔を埋めた。

「どこか痛むのか？」

佐原の手が肩に置かれ、きまりの悪さに拍車がかかった。彼女は膝を抱えたまま、佐原の手から逃げてベッドと机の間に身を隠した。もちろん、佐原の目から隠れるはずもないのだが……これは

気持ちの問題だ。

「おい、何やってる？ 頭とか、打ったりしなかったのか？」

例のブツを着込んだ佐原が言う。あのときと同じ、貴公子のように美味しく変身した佐原……
写メを撮らせてもらって、思う存分記憶にインプットして……ふ、触れたりとか……
なのに……なのに……あんな無様な姿を、貴公子佐原に晒さらしてしまったなんて……

馬鹿、馬鹿っ！ わたしの大馬鹿っ！ 大マヌケ！

「沙帆子？」

「ひっ……ひとりに……し、し……」

あまりの情けなさに胸に熱いものが込み上げてくる。沙帆子はしゃくりあげそうになり、いったん言葉をやめた。

「しといて……くだ……え、あっ……な……」

沙帆子の両脇に佐原の手が突っ込まれ、彼女は隠れ場所から強引に引きずり出された。

「せ、先生！ や、やめて」

「ほら、撮影会だ」

撮影会？

「立ち直れないくらい落ち込んでるんです。なのに、どうしてそつとしいてくれないんですか？」
「時間がない。それに明日から試験だ。そんなに落ち込みたいなら、試験が終わってから、好きなだけ落ち込め」

「そんなんじや、遅すぎますよお」

「ほら、撮るぞ」

佐原は沙帆子の言葉に耳を貸さず、無理やり立たせた。ふてくされつつも、沙帆子はスカートの前を押さえるのは忘れなかった。

「嫌ですよ。こんな格好、撮られるのなんて……」

「去年、さんざん撮られてたじゃないか」

デジカメを沙帆子に向けながら、佐原は不機嫌そうに言う。

去年？ それって、学園祭のときのことか？

好きなメイドを選んで、写真撮影つてのがあったが、そのことを言っているのだろうか？

「あ、あれは、そういう企画だったから、仕方がなかったんで……」

「ずいぶん嬉しそうな顔して撮られてたよな」

「だって、微笑まなきやいけなかったんです。そう言われて……でも、先生、なんでそんなこと知ってるんですか？」

佐原の顔が険悪ゆがに歪ゆがんだ。どうやら言っではならない言葉を口にしてしまったようだった。

き、貴公子が……これじゃ、裏貴公子……

パシャッとフラッシュが光った。佐原を拗すねた目で睨にらんだ沙帆子は、あれっ？ と眉を上げた。
彼が手にしているのはデジカメではないか。あの使い捨てカメラはどうしたのだ？

「先生、そのデジカメ、どうしたんですか？」

「持ってきたに決まってるだろ」

そう答えつつ、重ねてフラッシュをたく。

「使い捨てカメラは？」

「あんなんで撮れるか。現像なんかに出したら、お前のその格好、他のやつに見られるかもしれないぞ」

そ、それはそうか。なら、あの使い捨てカメラは、なんのために？

「おい」

「は、はい？」

「スカートから手を離せ」

「えっ。やですよ」

「なんだって？ メイドのくせに、生意気な口利きやがって」

ドスの効きすぎた声に、沙帆子はびびり、スカートから手を離した。

「もっとそれらしく振舞えよ」

なんだか知らないが、佐原はえらく喧嘩腰だ。

「そ、それらしくって？」

いったいどんな振る舞いをしろと……？

「メイド喫茶で、入ってきた客になんて言ってた？ 覚えてんだろ？ ほら、言ってみろよ」

沙帆子は顔を引きつらせた。

「お、覚えて……」

佐原が凄まじい目で、ギロリと睨んできた。沙帆子は震え上がった。

「覚えてないとかぬかすなよ！ つい数ヶ月前のことだぞ」

「……」

こ、これは苛めだ。それも超理不尽な……。彼女が何をしたというわけでもないのに、なんで？

佐原がずいっと歩み寄ってきて、怯えて固まった沙帆子の顎をくいっと持ち上げた。

ひ、ひよ、ひよえっつ。

「言えよ」

静かな声だった。けど、たっぷりと脅しが含まれて……

「な、な……なんて？ ……あ、あわっ」

がしっと口の片方に、佐原の指が突っ込まれた。そして掴まれたほっぺたが、外方向へむにっと

伸ばされた。

「い、いはい、いはいでふ」

「どうだ。思い出したか？」

「お、思いだへたようひゃ……き、気がひまふ」

「それはよかった」

ふっと危険な笑みを浮かべ、佐原はほっぺたから手を離し、少し距離を取った。

「で？」

デジカメを構えている左腕の肘に右手を当て、斜に構えて佐原が言った。ぞくりとするほど、セクシーな表情とポーズに、沙帆子はいまの立場も忘れてぼーとなった。なんでこんなに、無駄なほどカッコいいんだ、このひとは……

沙帆子は心の中で無念の呻きを上げ、メイド喫茶のときのことを思い出しつつ、両手を揃えてぺこりと頭を下げた。

「お、お帰りなさいませ。ご主人様」

「声が小さい」

言うだろうと思ったが、それでも、むかつ腹が立った。

「お帰りなさいませ。ご主人様！」

反抗的な沙帆子の態度に対して佐原は何も言わず、デジカメを顔の横で構えたまま、じつと見つめてくる。

沈黙が針のように痛かった。彼女の腹立ちは、あつという間に小さくしぼんだ。

せ、責めて、責めて欲しいよお。

「ど？」

「先生……意地悪ですよお」

俯いたまま小声で呟いた彼女の前に、佐原が立った。

「今年の学園祭、またメイド喫茶やるなんてことになったら、もう学校休め。いいな」

沙帆子は顔を上げて佐原と目を合わせた。

「もう十二時になる。着替えついでに、風呂に入ってこい」

「で、でも。先生の写メ、まだ……」

「あとで、好きなだけ撮らせてやる」

「ほ、ほんと？」

「ああ。だから、早いとこ、入ってこい」

佐原に背中を押され、部屋から追い出されそうになった沙帆子は、足を踏ん張った。

「先生、パパとママは、いったいどうなってるんですか？」

「今夜は帰ってこない」

「えっ？ な、なんで？ほんとなんですか？パパとママ、いったいどこに？」

「引越し先に行ってる」

「引越し先？う、うそっ！」

「幸弘さんが、今日の午後、急に向こうに行かなくちゃならなくなったそうだ。芙美子さんは、はじめは行くつもりなかったらしいんだが……結局、行ったらしい」

「そういうことだったのか。あれっ？ということはつまり、今夜は先生と、ふたりきりってこと？」

「明日の夜、帰ってくるそうだ。ほら、ともかく風呂に入ってこい。いつまでもそんなもの着てるの見せられてたら、抑えが……」

えっ、抑えがって？

「ほら。行けって」

佐原は、邪険な仕草で沙帆子を無理やり押しつけてくる。

「そ、それじゃ、着替えを持ってかないと……」

佐原の視線を気にしつつ、沙帆子は替えの下着を取り出し、イチゴ柄のパジャマを出した。イチゴの柄は、哀しいほど子どもっぽく見える。佐原に見られるのがわかっていて、こいつを着なければならぬのか？

まあ、あのとんでもなくエロいネグリジエよりは……まじだろうか……？

沙帆子は焦るあまり、ほとんど浸かることもせず、風呂から上がった。

佐原は、あのスーツを着たまま、ちゃんと待っていてくれるだろうか？

自分の部屋に戻り、ドアを開けた彼女の目に、貴公子のスーツが飛び込んできた。だが、中身はなく、ハンガーにかけられたスーツが壁にかかっていただけ……

「先生、嘘つきっ！」

彼女はベッドに飛んでゆき、佐原の身体で盛り上がっている布団の上に乗った。

「重い」

「スーツは？ 写メは？ どうなったんですか？ 話が違いますよ」

「あとで、いくらでも撮らせてやるさ」

ものすごくうざったそうに佐原が言う。

「あとでいいつなんですか？ あとなんかじゃなくて、いまの約束ですよ」

「時計見てみる」

沙帆子は思わず、時計に目を向けた。

「すでに日付が変わってるだろ。明日は試験だぞ。寝る時間だ」

「でも先生、お風呂は？」

「ここに来る前にシャワー浴びてきた。もう口論はいい。イチゴ柄、いいからさっさと寝ろ」

「でも、写メ撮るんです。ものすごく楽しみにしてたのに、このままじゃ心残りです寝られません」

「お前な。なんでそんなに、あのスーツに固執するんだ？」

「だ、だって……そんなの、わたしにもわかりませんよ」

「それじゃあ、明日の朝だ。ならいいだろ？」

「ほ、ほんとですね。ほんとにほんとですね。約束ですよ」

「ああ」

佐原が両手を伸ばしてきた。沙帆子は彼のなすがまま、布団の中に収まった。

「いいか、おとなしく寝ろよ」

彼女の身体を抱えるような姿勢を取って佐原が言った。沙帆子の頭は佐原の片腕に抱えられ、居心地よく収まっている。

心臓がドクドクとありえないほど高鳴った。布団の中で密着しているふたりの身体。意識するなというほうが無理というもの。佐原の体温が直接伝わってくるし、目の前には佐原の胸。

うわわっ、いいのか、男女が同じ布団に寝て……

けど、おとなしく寝ろということとは、ドキドキするようなことは、なんにも起こらないってこと？
沙帆子は、そっと佐原を窺ってみた。暗闇の中、佐原の静かな息が聞こえる。

これまでの、とても口にできないあれやこれやの甘い体験が脳裏に蘇り、沙帆子は顔を真っ赤に染めた。

けれどいまは、佐原は何もしてこない。今日はムラムラが発生しない日ってことなのか？

ムラムラするのは、常に発生するものじゃないってことなのか？

きつとそうなのだろう。

そう結論付けた沙帆子は、ほっとしつつも、かなり残念に感じている自分に気づいて、顔を赤らめた。

わたしってば……乙女のくせにい……

しかし、この状況、とんでもなくしあわせなことには違いない。

それに、明日の朝には、あのスーツ姿の先生を写メに撮らせてもらえるのだ。

何枚くらい撮らせてもらえるんだろう？ 何枚でもわたしの好きなだけとか？

しあわせな吐息をついた沙帆子は、思わず佐原にきゅっと抱きついてた。

佐原の身体に寄り添い、至福の笑みを浮かべつつ、このままでは寝られそうもないと心配していた沙帆子だったが、佐原の温もりに包まれて、五分も経たないうちに眠りに落ちていた。

佐原のもどかしいようなため息と、眠りを妨げないように繰り返されたくちづけに気づくこともなく、沙帆子は甘い夢の中にいた。

3 盗撮犯の運命

ぱちつと目を開けたら、目の前に憧れのひとが眠っていた。

な、なんて美味しい話だろう。だが、本当のところ、目の前にある佐原の寝顔が実在のものとして、どうしても意識できない。どうして、佐原先生がここにいるのだ？ そう思えてならないのだ。

ここはわたしの部屋だよ？ わたしの部屋のベッドに、佐原先生は本当に寝ているんだよね？

絶対に夢じゃない、夢なんかじゃ……。沙帆子は、右手で右のほっぺたを、思い切り抓った。
い、いたいよ。

マジな痛みと嬉しさで、涙が滲む。

沙帆子は息を潜めて佐原の寝顔を見つめた。少し不機嫌そうに見える。

けど、なんというのか……

「守ってあげるよお」と抱きしめたくなるくらい、母性本能をくすぐられる。

実際は、守ろうなんて気を起こしたら、ウザイとか言っつて、張り倒されそうだが……

沙帆子は佐原を起こさないように、ものすごく神経を使いながら、彼の身体に寄り添ってみた。

時刻はすでに六時を回っている。いつもだと、そろそろ起きてお弁当を作らなければならぬ時間だ。朝ごはんはもちろんここで食べていくんだろうけど……

学校まで、沙帆子はいつもどおり電車で行くのだろうか？ それとも佐原の車で？

佐原を起こして、どうするのか聞くべきなのだが、ぴったり張り付いているこのしあわせを、簡単に手放す気にはなれない。

まだまだ、飽きるほど寝顔を見ていたいし……できれば……

キ、キスしたい……

……し、してもいいだろうか？

……い、いいんじゃないだろうか？ ……たぶん……

彼女は、誤魔化すように小さな咳をし、それでも佐原が起きないことを確かめた。さらに誰もいないことを知りながらも周りを確認し、それから佐原に顔を近づけていった。

沙帆子の企みは、拍子抜けするくらい簡単に実行できた。佐原の唇の感触を甘く味わったが、それでもまったく起きる気配はない。その事実には、沙帆子は大胆になった。

彼女は横向きに寝ている佐原の身体に両手を回し、ぎゅっと抱きしめて、その胸に頬を何度もすり寄せた。

好き勝手ばかりしている楽しい時間は、潤滑油をたっぷり与えられた滑車ののように、よく回転するようだった。時間はあつという間に過ぎてしまい、時計を確かめた沙帆子は、たつぷりと未練を残しつつ、ベッドから出た。だが、部屋を出た途端、ものすごい後悔を感じた。

朝ごはんなんてどうでもいいから、佐原が目覚ますまで、彼に張り付いていればよかったかも。こんなチャンス、二度とないと思うし……

いや、そんなことはない。結婚するのだ……チャンスはいくらでもあるはずだ。

そうだ！ さつさと、お弁当と朝食の支度を終えれば、またベッドに戻る時間ができる。

キッチンにすっ飛んでいった沙帆子は、いそいそと冷蔵庫を開け、今日のお弁当の食材を取り出した。お弁当は佐原の分だけだ。彼女は、午前中、三時間の試験のあと、すぐに下校できる。

お弁当作りと朝食の準備をしていた沙帆子は、ぴたりと手を止めた。

そうだ、先生の寝顔の写メ……撮つとけばよかった。

彼女は自分の部屋のほうを振り返った。

まだ間に合うかも。それとも、すでに起きてしまっただろうか？

作りかけのサラダを放り出すと、沙帆子は焦って手を洗い、自分の部屋に小走りに戻った。

ゆっくりとドアを開けた沙帆子は、佐原の身体で盛り上がった布団を確かめつつ、物音を立てないように、そーっと部屋の中に忍び込んだ。

携帯……まずは携帯を手にするのだ。

彼女は息を止め、一步一步と歩みを進めて、携帯を置いている机に近づいた。静かすぎる部屋に、佐原のかすかな寝息が聞こえる。ベッド脇に立った沙帆子は、ぎこちなく首を動かし、佐原がまだ寝ているかどうか確認した。

寝ているようにしか見えない。

よーおっし！

携帯を挿んだ沙帆子は、音を立てないように注意しつつ、片手で決めのガッツポーズをした。そ

して佐原を振り返る。相変わらず、ぐっすりと寝込んでいるようだ。彼女は左右の足をロボットのよう交互に上げつつ、そっとそっとベッドに近づいた。

できるならば、その美味しい寝顔を、ドアップでいただきたい！

携帯を佐原に向けた途端、心臓が手に余るほど胸の中で暴れ始めた。彼女は深呼吸して自分を落ち着かせ、佐原の顔に携帯を近づけていった。息を止めているために、ひどく苦しい。

だが、死んでも撮る！

佐原の顔まで三十センチの距離で、沙帆子はシャッターを切った。

カシャッ！

その音は、無音の部屋に、とんでもなく響き渡った。沙帆子は心臓が止まった気がした。

ば、馬鹿！ わたしの大馬鹿！ サイレントにしとかなきゃならなかったのに……

彼女は恐る恐る佐原を見つめた。

ね、寝てる？ ……寝てるようだ。

沙帆子はほーつと息を吐き、撮ったばかりのお宝画像を手早く保存すると、その出来栄を確かめた。

す、すごい！

「うはっ」

思わず喜びと感嘆の声を漏らしてしまった沙帆子は、慌てて口を押さえた。だが、顔はどうしようもないほど、しまりなく緩む。調子づいた彼女は、携帯をサイレントにし、再びシャッターを切

った。

カシャッ！

沙帆子の中では鳴るはずのなかったシャッター音。彼女はビックリ仰天して飛び上がった。

な、な、な、なんで鳴る？

沙帆子は恐怖におののいた目で携帯を見つめ、ハッと気づいて佐原に目を向けた。

お、起きてない！ セ、セ、セ、セーフ！！

それにしてもこの携帯……なんで音が消えないのだ？ こ、壊れてるんだろうか？

そういえば……いつだったかテレビで、盗撮防止のためシャッター音は消せないとかなんとか、言っただけだったか？

そ、そうかあ。

疑問は消えたが……罪の意識がとんでもなく増した。盗撮イコール罪の公式が、沙帆子をチクチクと苛む。恐ろしくてこれ以上、写メは撮れなくなった。だからといって、すでに撮ったお宝画像を消去するなんて、もったいない。ここは良心を捨て去るのだ。それしかない。

彼女は、ゲットした二枚のお宝画像の品質の高さに、ほれぼれと見入っていたが、人間というのは、底知れない欲を持っているようだ。沙帆子は、物音を立てないように引き出しからハンカチを取り出し、それで携帯を包み込んだ。

極悪犯になった気分だ。

ハンカチに包まれた携帯を構え、沙帆子は佐原の身体を覆っている布団をそーっと捲った。

「う……ん？」

突然の佐原の呟きに、沙帆子の心臓がでんぐりがえった。

驚愕に囚われた彼女は、思わず証拠隠滅を図って携帯を投げていた。
ガン！

携帯が壁にぶち当たった音に、沙帆子の顔から血の気が引いた。

ハンカチのほうはふわりと舞い、携帯とは対照的に、ベッドの上に音もなく落ちた。

こ、壊れた？

「なんだ？」

いまや佐原は、目覚めのときを迎え、不審そうな目を沙帆子に向けている。

恐怖に駆られた沙帆子は、激しく首を左右に振ってしまい、ハツとして動きを止めた。

これでは、疑ってくれと言っているようなものだ。

「お、お、おはよう、ご、ございます」

「お前……何を焦ってる？」

「べ、べ、別に……な、な、なぬも」

「なぬもってなんだ？」

赤くなった沙帆子は、目を瞑って心を落ち着かせた。

携帯のことは、いったん忘れよう……

もしかしたら、壊れていないかもしれないし……

「おい？」

「ご、ご飯できてます」

「ああ……いま……何時だ？」

「え、えーっと、七時十五分前です」

「そうか」

「あ、あの。今日って、わたし、普通に学校に行くんですよね？」

佐原が眉を寄せた。

「行くに決まってるだろ。今日は試験なんだぞ。そんな当たり前のこと、なんでわざわざ聞く？」

「いえ。ですから、普段どおりに、電車に乗ってけばいいのかなって……」

「何言ってる。俺がいるんだから、俺と一緒に行くに決まってるだろ」

「で、でも。誰かに見られたりしたら……」

「別に見られても構わない。と言いたいところだが……まあ、俺に任せとけ。それより、イチゴ柄」

イチゴ柄という呼びかけに、沙帆子はむっとした。

「そんな呼び方しないでください」

「そのパジャマ着てると、イチゴが目飛び込んでくるんだ。仕方がないだろ」

沙帆子はふてくされた。仕方がないとかじゃないと思う。

佐原はベッドから降り、彼女の横を通りざまキスをした。そのままドアに向かって歩み、途中で

足を止める。そして腰を屈めて何かを拾った。

突然のキスに固まっていた沙帆子は、それが何かに気づいて飛び上がった。

「あーっ！」

「お前の携帯、なんでこんなところに落ちてるんだ？」

「お、おと、落としました」

沙帆子は佐原に駆け寄り、手を伸ばして携帯を取り戻そうと躍起やっつきになった。

「なんでそんなに焦ってる？」

「な、なんでもありません。返してください」

佐原は眉を寄せ、携帯を彼女の手が届かない位置まで持ち上げると、不審な目を向けてきた。

「何かあるな？ いったい、なんだ？」

「写、写、写メ。撮らせてくれるんですよね？ 約束したし」

「お前が動揺しているわけを話せば、考えてやろう」

「そんなのおかしいですよ。昨日の約束で、撮らせてくれるってことになってるのに、また条件を持ち出すなんて」

「俺に御託ごたたくを抜かすとは、えらくなったじゃないか。ああ？」

佐原に凄すごまれて、沙帆子は怯おそえて身を引いた。だが、がしつと腕を掴つかまれていて離れられない。

「ご、御託とかじゃ、ないじゃないですかあ」

「ふん」

佐原は鼻であしらい、沙帆子の携帯をいじり始めた。彼女の焦りと恐怖はピークに達した。

「な、何するつもりなんですか？」

「写メ」

き、気づかされてる？

佐原は、青くなっている沙帆子の肩を抱き、ぐつと自分に引き寄せた。

カシャッ！

「え？」

どうやら佐原は、沙帆子とツーショットの写真を撮ったらしい。

「せ、先生？」

「あいつら、これ見せられたら、信じるしかないだろうな」

画面を見つめた佐原は、そう言ってくすくす笑い出した。

あいつらとは、沙帆子の友達いざわちかの飯沢千里と、江藤詩織えとうしおりのことだ。ふたりには結婚式に来てもらいたいと思っていて、佐原と沙帆子が結婚するということを何度も話そうとしてきたのだが、まったく信じてもらえないでいる。

沙帆子は携帯画面に映し出されている、パジャマ姿のふたりを見つめた。

確かに、こいつを見たら、無条件で信じてくれそうだ。

けど、イチゴ柄のパジャマ姿だなんて……佐原はいいだろう。千里や詩織に見られても、この素敵なパジャマ姿なら……。沙帆子の目には、あまりに不似合いなふたりにしか見え、哀しくなる。

「イチゴ柄でツーショットなんて、見られたくないですよ」

ふーっと頬を膨らませた沙帆子に、佐原がさつと振り返ってきた。それまでの和やかさなど吹っ飛ぶほど、目つきが鋭くなっている。

い、いつたい？

「先生、どうしたん……あつ！」

目の前に、公にできないお宝画像が突き出され、彼女は顔を引きつらせた。

「どういうことかな？」

沙帆子は身を縮ませて震え上がった。

脅しを込めて、こもやさしい声を出すひとは、他にいないだろうと思えた。

4 シャッターチャンス

「俺が寝てる間に……ずいぶんと、暗躍してたようじゃないか？」

佐原の言葉に、内緒のキスやら、胸すりすりやらの、したい放題やらかしたことが、頭にドンと蘇り、沙帆子は滑稽なほど動揺した。

「そ、んにゃ、こつ、こつこ、と……にゃわ……わわわ……」

目を異様に泳がせて、どもりまくっている沙帆子を見て、佐原の目が鋭さを増す。

お、落ち着けわたし！ 落ち着くんた！ このままじゃ、墓穴だ、墓穴状態だぞっ！

そう自分をいさめればいさめるほど、動揺は増してゆく。

佐原は沙帆子の動揺ぶりなど無視して、自分の寝顔が映っている画面を嫌そうに睨みつけた。

その表情に焦りを感じ、必死に手を伸ばすものの、佐原は彼女の顔面を手のひらで押さえつけ、やすやすと行動を阻む。

せつかくのお宝画像なのに。あんなに苦労して撮ったのに。こ、このままでは、消されてしまう。

それだけはいやだあー。

「先生、携帯返してください。お願いします」

「やだね」

そつけない拒否の言葉に、絶望が湧く。沙帆子は佐原に縋りついた。

「こんなもの……」

「な、な、なんでもします。先生、なんでもしますから。消すのだけは許してください」

佐原はびたりと言葉を止め、自分に縋りついている沙帆子をじつと見下ろしてきた。

「なんでもする？」

「は、はいっ」

沙帆子はこくこくと頷き、佐原の掴んでいる携帯に、また手を伸ばした。だが、手を伸ばしただけ携帯は遠のく。

「なんでもします。パシリでもなんでも。だからその画像だけは……」

「なんでもだな？」

お宝画像を無事に取り返すことしか頭にない沙帆子は、佐原の声にあくどい愉悦が含まれていることに、気づけなかった。

「はい。なんでもですっ」

きっぱり言い切った沙帆子の目の前に、携帯が差し出された。飛びつくように携帯を取り返した彼女は、再び奪い返されたりしないように後ろ手に隠した。

「それじゃ、めし」

「え？ あ、は、はい」

どうやら脅威は去ったようだ。ほっとした沙帆子は、携帯をイチゴ柄のパジャマのポケットに、そそくさとしまい込みながら返事をした。

「朝飯、なんだ？」

「えーと、トーストと、スクランブルエッグとウインナーとサラダ、あと、飲み物は紅茶にしようと思っってますけど……」

「そういえば、サラダ……作りかけで……」

「ふうん」

その短い言葉に、まずまずだなの響きを感じ取り、沙帆子は安堵した。彼の機嫌も戻ったようだ。

物を食べるときの佐原先生って、いつも無表情だな。

美味しいのか美味しくないのか、表情からは読み取れない。だが、口では美味しいと淡々とだが

言葉にしてくれて、それが嘘ではなく本心だということもちゃんと伝わってくる。

「なんだ？」

佐原に見惚れていた沙帆子は、急に声をかけられて慌ててしまった。

「い、いえ……」

「なんだ？ 気になるだろ」

「な、なんか……先生って、ご飯食べてるとき、無表情だなんて……」

佐原は眉を上げ、少し考えてから口を開いた。

「無難だったから……かな」

「はい？ 無難って？」

「まずい顔できないだろ？ 傷つくだろうし……」

それって、佐原先生のお母さんのこと？

「先生のお母さんのお料理、美味しかったですよ」

「あの甘みがそこそこ消えればな」

佐原は、トーストに薄くバターを塗り、頬張った。

「なら、もう少し、甘みを減らして欲しいって言えばよくないですか？」

沙帆子は、自分の分のトーストに、イチゴジャムをたっぷり塗りながら言った。

「どうしてかな？ それが言えない」

佐原は自分を振り返ってか、ひどく苦い笑いを浮かべた。

ずっと……佐原はそうやって、子ども時代の食生活を送ってきたのか？

彼が言わないから、佐原の母は……息子が甘いものが苦手だということを知らずに……

「お前……なんで泣いてる？ 泣くような会話なんて、してないだろ？」

沙帆子はぶんぶんと首を振った。

「だって……む、胸が切なくなっちゃって」

「どうして？」

「先生……あんまりやさしいから……」

「はああ」

意味がわからないらしい佐原は、ひどく奇怪そうな声を張り上げた。

「し、写真？」

沙帆子は心ここにあらずで、佐原の口にした言葉を、ただ繰り返した。

制服に着替えた彼女が、自分の部屋から出ると、目の前に例のブツを着込んだ佐原がいたのでは、理性も吹っ飛ばすというものだ。嬉しさに涙が滲む。佐原はちゃんと約束を守ってくれたのだ。

なんだかんだ言っても、佐原先生はやさしい……

心の中で感涙にむせびつつ、彼女は制服のポケットから携帯を取り出すと、さっそく写メの準備を始めた。

「お前、なんで電話なんかかけようとしてる？」

「電話じゃないですよ。写メですよ」

「何を勘違いしてるんだ、撮るのは俺だ。いいから早く部屋に戻れよ」

佐原は沙帆子の肩を掴み、彼女の部屋に向けて押してきた。

「い、いったいなんですか？ 先生の写真、撮らせてくれるんでしょう？」

「もう時間がない。試験だつてのに遅刻なんかしてられないぞ。ごたごた言わずに、いいから部屋に入れ」

沙帆子は、強引に部屋に戻された。

「そうだな。まず勉強机を前にして座れ」

傲慢な口ぶりで指示すると、佐原は距離を置いてカメラを構えた。

「あ、あの？」

時間がないとか言いつつ……いったいこれは？

「撮るぞ」

佐原が持っているのは、デジカメではなく、なぜか昨日テーブルの上に置いてあった使い捨てカメラだ。謎が増えた。

「いったい？ どういうことなんですか？」

「何が？ おい、いいから、こっち向いて笑え」

「事態がわかんないのに、笑えって言われたって……」

「笑え！」

佐原の凄まじい怒号に、沙帆子はびくと震え、かなりの努力の末に無理やり笑みを浮かべた。
「ぎこちないな。もっと自然に笑えよ」

ぎこちなくさせてる本人に言われたくない。佐原は、ポーズを変えさせて数枚写真を撮った。続いてあちこちに沙帆子を立たせたあげく、さらに写真を撮り続ける。

「いったい、この撮影会にはなんの意味があるのだ？」

佐原に問いただしたかったが、素直に答えてくれるとは思えなかった。

「よし。終わったな。まあ、表情がまいちだったかもしれないが……芙美子さんも文句は言わないだろ」

「ママ？」

「ほら」

カメラを持った手を下ろした佐原は、顎をしゃくって何やら促すように言う。

何を言っているのかさっぱり意味がわからず、沙帆子は「え？」と聞き返した。

「撮りたかったんじゃないのか？ 撮らないなら行くぞ。鞆持て」

「と、撮るって……せ、先生……」

背を見せてドアに向かってゆく佐原を、沙帆子は慌てて呼び止めた。

「ま、待ってください」

佐原は、めんどくさそうに振り返った。

「撮らせてもらえるんですか？」

「十秒」

そう言うと、佐原は真正面を向いてきた。

「じ、じゅう？」

彼女は一瞬固まり、事の次第をようやく頭で理解し、それからやっと携帯を取り出した。

佐原は沙帆子の慌てぶりを冷めた目で見つめつつ、じっとして待っているが、彼が心の中で数えているのは間違いない。十まで数え終えたら、携帯を持ってもたもたしたあげく、一枚も撮れずに時間延長を乞う彼女のことを、まず間違はなく邪険にかわし、さっさと家を出ようとすることに違いない。そう考えるとむかつくが、お宝画像の誘惑には勝てない。沙帆子はちよっぴり哀しい気分で、美味しい佐原に向けてなんとか携帯を構え、シャッターを切った。

「撮ったな。それじゃ、行くぞ」

「せ、先生。まだ一枚しか……」

「二枚と、言ったか？」

「それは言っただけ……」

「十秒も過ぎた。二枚とは聞いていない。なのに文句を言うのか？」

「でも、好きなだけ撮らせてやるって、先生、言ったじゃないですかあ」

「それは時間があればの話だ」

「そ、そんなあ」

沙帆子は腕を掴まれ、引きずられながら我が家を出た。

佐原の車が学校へ向かって走っている。途中までは、沙帆子もどこを走っているのか理解していたが、脇道へと曲がってからは、自分がどのあたりにいるのか、まったくわからなくなった。けれど、別に心配はしていない。車は間違いない、学校に近づいているはずだ。

ダークスーツで運転している佐原を見つめていると、頭のてっぺんから噴き出しそうなほど、しあわせ気分が膨らんでくる。貴公子佐原の車の助手席に乗せてもらっているこれは、夢か現か幻か？ あー、触れたい……で、できるならば、ぎゅーっと抱きしめたい。

思わず佐原に向けて手が伸びそうになるが、最後の勇気がなくてどうしても実行できない。沙帆子は自分の意気地のなさのため息をつき、窓の外に目を向けて、見慣れない朝の風景を眺めた。

車は町中を抜けて、田舎のようなのどかな地域を五分ほど走り、大きな道を横断して、車一台が通れるほどの細い道に入り込んだ。周囲は果樹園のようだ。

桃の木……？ もしやこは？

「先生、ここって、学校長さんの果樹園ですか？」

「知ってたのか？」

あっさりと認められて、沙帆子は驚き、目を見開いた。

「あの噂、本当だったんですね」

「噂？」

「はい。学校長さん、葡萄酒ぶどうを持ってらって……桃畑とかも、いろいろ……」

沙帆子は、周囲に広がる風景に圧倒された。ちよつとやさつとの広さじゃない。

「本当のことだったんですね。ワイン工場も経営してるって噂があるんですけど……」

沙帆子は、自分が言った言葉に笑った。さすがにそれはないだろう。

「ああ。質を極めて作ってるから……評判良くて、あちこちに卸おろしてるみたいだ」

「へっ？」

思ってもなかった肯定に、沙帆子の叫びはけつたいなものになった。

「お前が成人になったら、祝いに、このワインを飲もう」

佐原は、とんでもなく嬉しいことを、なんとも淡々と言う。

わたしの成人のお祝いに、ワインを飲もうって、先生いま言ったよね？

ふたりきりでワインのグラスを合わせている甘い匂が頭に浮かび、ついにやついてしまう。

しかし、ワイン工場ってのは、本当のことだったのか？

「ほんとに、ワイン工場があるんですか？」

「なんだ。嘘だと思ってたのか？」

「はい。なんか、その……途方もないっていうか……」

「そうか？ ワイン工場くらいで驚くこともないだろう？」

立ち読みサンプル はここまで